

# まぼろしの杉を見に行く

## ソデカ杉探検 in 南八甲田

“まぼろしの杉”を見に行こう——。南八甲田の、袖ヶ谷そでかやち地に生えているという、ソデカ杉。天然なのか、人工なのか。樹齡は？——青森県内で杉が生育できる限界といわれる標高700メートルを超えるアオモリトドマツの林の中に、謎に包まれて立っている杉の探検に有志6人が向かった。御鼻部山おはなべやまの登山口から、ぬかるみあり、倒木ありの山道を2時間歩いて行った先の湿原の向こうに、立てた傘を想わせる三角の杉の樹影が、霧に滲んでいた。

### ぬかるみと倒木の連続 雨に打たれて歩く6人

アカシヨウビンが鳴けば雨になる——。

M氏が言ったとおりに、曇り空から雨粒が落ちてきた。みるみる本降りになって、御鼻部山展望所の駐車場に停めた3台の車の屋根を激しく叩き出した。『ソデカ杉探検』の二行6人は、公衆トイレの屋根の下でカッパに着替え、長靴に履き替えると、ヘアピンカーブのわきにある登山口へ車で移動した。そこから2時間歩いていった先

の袖ヶ谷地に、目指すソデカ杉はあるのだ。

公務員のM氏が隊長として先頭に立つ。M氏と同じ職場のT子さんとM子さん、元業界新聞社記者のN、工務店社長のSと続く。しんがりを務めるのは、M氏たちの上司のK氏。K氏は大学時代にワンダーフォーゲル部に所属していた“山男”である。雨の中を6人は1列になつて歩き出した。

アカシヨウビンの鳴き声を聞いたのは、その日(6月29日、日曜日)の朝早く、十和田湖畔の生おいで出キャンプ場だった。ガソ

リン式のストープ(携帯コンロ)にフライパンをのせて朝食のウインナーソーセージを茹でていたM氏が、「あ、アカシヨウビンだ」と手を止めて、木立ちに目を向けた。他の5人も顔を上げる。「ほらほら、この鳴き声、ヒキウロロ……って鳴いてるでしょ」とM氏が言うものの、耳にはつきりと聞き分けられるのはウグイスの声ばかりで、視線が泳いでいたのはNだけではなかったようだ。

「十二湖にはいるんですけどね、このあたりで聞こえるのは珍しいはずですよ。カワセミの



湿原の向こうに三角の“一本杉”の樹影を発見(写真中央よりやや右)



ぬかるみに足をとられながら進む一行

仲間なんです。へえ、十和田湖にもいるんですね。雨乞い鳥ともいましてね、天気の良い日中はあまり鳴かないんです。曇り空の、ちよど今のような降り出しそうなきによく鳴くんですよ」と物知りのM氏。そのとおりに雨になったのだった。

長靴に履き替えて良かった——とNは歩きながら胸をなで下ろす思いだった。ヒモで縛るトレッキングシューズのほうが歩きやすいのだが、長靴を勧めるM氏に従って良かった。ぬかるみが待ち構えていたのだ。トレッキングシューズだったなら

泥にまみれて泣きが入っていたに違いない。

2週間前に事前にコースを下見したというM氏から届いたメールには、こうあった。

〈登山口(標高940メートル)から1時間10分ぐらいは平坦な山道で、ところどころにぬかるみがある。履物は長靴が良い。954メートルのヘアピンカーブあたりは多くの倒木で山道が荒れ、笹藪地帯。1時間20分ほどで善光寺平分岐に着き、そこから10分ほどで袖ヶ谷地(864メートル)に着く。袖ヶ谷地からさらに藪を漕いで5分ぐらいいのところにソデカ杉がある〉

ぬかるみから長靴を引き抜いては、踏み出した長靴がまた埋まる。連続するのはぬかるみだけではなかった。倒木が通せん坊をしていた。雪で倒れたブナである。そこを、またぐ、くぐる。かがめた腰を伸ばすのが最年長(64歳)のNの足腰を攻めた。前をゆく若いT子さんは前

向きのままひよいとしゃがんで、立ち上がるが、Nはそうはいかない。横向きになつてくぐるが、背中のリュックがひっかかってバランスを崩したり、立ち上がれなくて手をついたり。やつと立ったら目の前の枝に気づかずに思い切り額をぶつけた。見兼ねたように後ろからM子さんが「大丈夫ですか」。早くも遭難しそうに見えたのだろう。大丈夫です、と答えて、前を向いたら、ゴツ。また枝にぶつかってNがよろけた。道が平坦なのがせめてもの救いだつた。

### 根づいたブナの若葉 ズダヤクシユの花も

先頭のM氏が立ち止まっていた。絞った帽子から水滴がしたたっている。雨は止む気配がない。帽子を被り直してM氏がかたわらの地面を指差した。「これ、ズダヤクシユの花です。長野県で喘息のことをズダと言い、喘息の薬になることからこの名前が付いたそうです」。



可憐に咲くコケイラン(左)と、実から根付いたブナの若葉

それを教えてくれるために待っていてくれたのだ。その前にも、可憐に咲くコケイランも教えてもらった。倒木に生えているナメコも、実から根付いたブナの若葉も。

次にM氏が立ち止まって見ているのは、花ではなく、木の幹だった。何かにひっかかれたように皮が剥がれている。「機械の





木の幹に残された謎の痕跡

ようなもので剥いだようにも見えるんですけど、この細い山道を重機が通るわけはないし、熊にしては爪痕がはつきりしないし、なんだろうな、これ」と目を近づけている。K氏もM氏に近づいて、並んで見ているが、結論は出なかった。マウンテンバイクのペダルかもしれない、とM氏。

実は山道を歩き出したばかりのときに、地面に細いタイヤの跡のようなものがついていた。「マウンテンバイクですわね」とM氏。山道をマウンテンバイクで

走破している愛好者たちがいるのだそうだ。跡が2本ついているから、2人連れのようだ。

「ひよつとしたら、自転車のペダルが思いっ切りここにぶつかったのかもしれないね。でも、熊の爪痕のように見えなくてもないし……」とM氏がつぶやく。K氏がうなずく。

謎を残して、一行はふたたび歩き出した。そのときだった——「熊だああああ」とM氏がこちらに駆け寄ってきた。叫びそうになるほど肝を潰した。M氏の顔が、笑っている。冗談なのだと察して、Nも笑ったつもりが、引きつった。

### 生出キャンプ場に1泊 翌日往復4時間の行軍

そこにあるはずのない杉が、生えているのだそうだ。南八甲田の、湿原が広がる袖ヶ谷地(標高864メートル)。この地域で杉が生育できる限界は700メートル程度といわれているが、それよりも高い、アオ

モリトドマツが育つ林の中に、1本だけ、生えているのだという。袖ヶ谷地に生えていることから、ソデカ杉。天然か、人工か。未だに解明されていない。このまぼろしの杉を見に行こう——。話はそこから始まった。

その日、居酒屋に3人が集まった。M氏、S社長、N。3人をつなぐキーワードは「杉」「県産材」「林業」である。林業の行政に携わるM氏、県産材を使っただ家づくりを展開する工務店のS社長、県産材による建築の普及を目標に青森県木材利用推進協議会が発行する住宅本の編集を担当しているN。むつ市から転勤で青森市に戻ってきたM氏と、久々に「猷酌み交わそうと集まったのである。

ソデカ杉の話も、初めてM氏から聞いたのも、やはりこの居酒屋で3人がテーブルを囲んでいたときだった。もう何年も前のことだが、Nの脳裏に「まぼろしの杉」として印象深く刻

まれた。行けるうちにいつて自分の目で見てみたい。その思いが募ってきていた。とはいえず、Nは山歩きなどしたことはない。対して50代半ばのM氏は、若かりし頃にアフリカのキリマンジェロ(5895メートル)などに登頂したことがあるという猛者である。Nは、途中でぼてて歩けなくなったらどうしよう——と一抹の不安が付きまとうものの、自分にけしかけるように、持ちかけた。

「今年、見に行きましょう」

ついに決行することになった『ソデカ杉探検』のスケジュール表が、M氏からメールで送られてきた。週末に迫っていた。

「タイトル『御鼻部山からソデカ杉を訪ねる』。サブタイトルは、〳〵南八甲田の奥、ブナやアオモリトドマツに囲まれて豪雪の中にひっそり生える杉を見に行く。6月28日(土)、十和田湖畔の生出キャンプ場に1泊。翌29日(日)、キャンプ場出発7

時30分↓登山口(御鼻部山)8時↓ソデカ杉10時20分↓昼食↓(還り)登山口(御鼻部山)13時30分↓温川温泉入浴14時↓青森着16時↓サブタイトルルまで付けるところにM氏の意気込みが感じられた。

参加者は6人に増えた。M氏、S社長、Nに加え、M氏の上司のK氏、M氏と同じ職場のT子さんとM子さん。うち二人が28日の夕方まで仕事が入っていたので、「行軍」は29日の朝からとなった。

明日は往復4時間の山歩きがあるのだから今夜の酒はほ



十和田湖畔の生田キャンプ場にテントを張る

どほどに——。言うばかりで守れた試しがない。その夜も、生田キャンプ場で、M氏が腕をふるってくれた特製タレの麻婆豆腐に舌鼓を打ちつつ、木製テーブルの上にはたちまちビールやチューハイの空き缶が並んでいた。

2週間前に、M氏とK氏はコースの下見に行つて、ソデカ杉を視認してきたらしい。その日も雨で、湿原に薄くかかる霧の向こう、アオモリトドマツの林の中に、1本だけ、傘を立てたような杉の樹影を見つけた、という。Nは、それまででつきり



M氏特製の麻婆豆腐

ソデカ杉は1本だけだとばかり思っていたら、M氏が言うには、「別のところにも10数本ま

とまつて生えている林があるんだそうです。それもソデカ杉です。下見に行つたときに見つけたのは「一本杉」で、そこから歩いて5分ぐらいのところにあるんだそうです」という。「ネットで探してみたら、山歩き愛好者がブログに綴っている山行記録に、ソデカ杉の林の写真が載っていました。明日はぜひそれを見たいんですけど、ガスがかかるとことも多いようですから、恵まれば発見できるということになりますね」

小柄な体つきのT子さんが、実は屋久島の縄文杉を見に1日ばかりで往復したこともあるという「山岳女子」だと知った。M氏とK氏は大学時代からの山男。Nは、取り残された心地になって、テントに移動してから飲んで弱気をまぎらわせた。二日酔いの翌朝に、アカシヨウビンが鳴いたのだった。

### マンモスの牙想わせる雪に捻じ曲げられた枝

「もうすぐカーブになります。そこを過ぎれば、近いですがから」。小休止していると、後ろからK氏が近づいてきてそう声をかけた。手にしているのはGPS。自分がいま八甲田の山中のどこを歩いているのか、ほぼピンポイントで分かる優れたものらしい。

カーブを過ぎれば、もうすぐ——。つぶやきつつNは己を叱咤する。ぬかるみはなくなつたが、倒木が増えた。またぐ。くぐる。目的地に着けるのだろうか。それよりも、往きがこの体たらくで、今来た道を戻れる体力が残っているのだろうか。ゴツ。倒木の枝が弱気になるNの額に喝を食らわせた。「熊だああああ!」。さっきの、M氏の叫び声が耳に戻った。ほんとうに熊だったら、いまごろはこうして歩いていないのである。熊、で思い出した。昨日の午

後、青森市から生出キャンプ場へ向かう車の中で、M氏とK氏が交わっていた熊の話題。——何人かのグループで山歩きをしていたときに、熊と遭遇したのだそうだ。ガサガサと音がする藪のほうへ目を向けたら、藪の上に、熊の顔があったとか。熊のほうも、人の気配がするから、立ち上がって、探していたのだろう。

熊と出遭ったら、刺激しないようにそのまま後ずさりすればよいと、熊のいないところで話せるものの、いざとなれば、熊だああああ！と慌てふためくに違いないが、M氏とK氏は、違った。逃げる、よりも、写真を撮る、ことが先だったという。千載一遇のチャンス！とばかりにカメラを向けたというから、とんでもない神経の持ち主たちと山歩きをすることになったものだ、とNは聞きながら嘆息する思いだった。……密生する笹藪が視界を覆う。前をゆくりユックしか見え

ない。「ここを抜けるとすぐですから」とまたM氏の声がする。力を振り絞る思いでNは前へ体を押し。豪雪地帯で生き抜いているだけに笹の腰が強いのだろう、まるで水中を漕ぐような強い抵抗感だ。

「あらあ……」。女性の声があった。T子さんだ。続いて、「うわあ、きれい」とM子さん。やっと抜けた笹藪の先に、別世界があった。林に囲まれた湿原地帯。薄くかかる霧に黄色をにじませているのはニッコウキスゲだ。白くて丸いワタスゲもある。ついに、袖ヶ谷地に着いたのだ。6人は立ち尽くして湿原を見渡す。

M氏が、「あそこです」と指差した。全員がその方向を向く。アオモリトドマツの林の端に、1本だけ、傘の先端のような、杉独特の三角の樹影がガスに滲んでいる。それがソデカ杉だと知らなければ見落とすのではないか。周りはアオモリトドマツだらけで、そもそもその中

に杉が生えているとはだれも思わないだろう。

「そばまで行ってみましょう」。M氏を先頭にふたたび笹藪を漕ぐ。すぐであった。杉のそばに寄って、6人が見上げる。樹高は目測で約10メートル。幹の太さは約40センチ。平地の人工林の杉なら高さ太さでおおよその樹齢は推定できるが、ここは南八甲田の山奥で、林がすっぽり豪雪に埋もれるに違いない。厳しい環境だ。生長のはやさも平地とは違う。

この1本だけを、誰かが植え



霧に包まれた湿原に咲くニッコウキスゲ

たものなのか。それとも種が飛んできてここに根づいたものなのか。あるいは天然の杉林だったのが徐々に減ってこの1本だけが残ったものか。

枝が捻じ曲げられたように下に垂れているのは、雪の重さだ。巨大なマンモスの牙を想わせる、その荒々しさ。押し潰そうとする八甲田の自然と、生き延びようとする杉の生命力とのせめぎ合い。何か厳粛なものを目の当たりにする思いで、6人は杉の前に立ったまま仰ぎ



アオモリトドマツの林の端に1本だけ生えるソデカ杉





巨大なマンモスの牙を想わせるソデカ杉の枝



見ていた。

小湿原へ移動し、縁に座ってパンで軽く昼食を摂った。M氏がナイフで切つてふるまってくれたハムのうまかったこと。スーパードで買った何の変哲もないハムが絶品に変身するのも山の力だろう。皆黙って口を動かしていると、「ブログの山行記録

に書いてあった”10数本立つ杉林”は、西のほうへ5分ほど行ったところというから、こつちだろう」とK氏。指差した小湿原の向こうの林に、しかし、杉と思われる樹影は見当たらない。「食べたら、突つ込んでみますか」とM氏が応える。2週間前と、今日と、2回も来ているのに見つけられないとは林業マンとしての活券にかかわる、と顔に書いてある。K氏も同様だ。

草地にへたり込んでいるNは、帰りの体力を押し量つていた。笹藪の抵抗にこれ以上体力を消耗すれば、倒木とぬかるみの往路を歩き切ることができるかどうか。否、と体がいついていた。

2組に分かれることにした。M氏とT氏とS社長が突つ込

む組。NとT子さんとM子さんが帰る組。Nがいなければ女性2人も突き進んでいたろう。前をT子さんに、後ろをM子さんに挟まれて歩くNは、護送がされているような感じを覚えていた。倒木をまたぎ、くぐり、ぬかるみに足を取られつつ戻る。1歩1歩入り口に近づいているという意識だけが励みであった。

### 一本杉と、10数本の杉林 天然か人工か謎のまま

探検の翌日、さっそくM氏からメールが送られてきた。Nは自宅で痛むふくらはぎをさすっていたが、他の5人は職場で仕事なのである。「定年」の身をあらためて実感した。

メールの内容はこうだった。〈雨の中、泥まみれの行軍ご苦労様でした。さて昨日、自宅に帰り、テントや洗濯物などもろもろのものをかたづけつつ、ソデカの杉の情報を探ろうと昔読んだ山関係の書籍を再度探索したところ、ついに見つけれ

した。著者は山田耕一郎という旧営林局の人で、これによると牧場の目印の人工林らしいと書いてあります。この本からソデカ杉の存在を知ったのだと思いい出しました。確かこれで興味を持ち、別の資料で藩政時代の境界に植えたという説も目にしたのだと思います。いずれにせよ私の知ってる人工林説はここから来ています。おもしろそうなのでPDFで送ります〉

それによると——「黒石の善光寺開拓を横切り、御鼻部へ達する道に出て、櫛ヶ峰の方向へ進むと間もなくソデカ杉というところに出る。ここには、藩政時代に放牧の目的として植えられたと思われるスギが大きく成長していて、ひとつの群落を作っている。(中略)このスギは、一時、海拔が高いために生息しているスギだから、寒さや雪には強いだろうと注目を浴びた。そして、ここから挿穂をとつて子を殖やし、あちこちに植えたのだったが、それらは

一体、現在はどうかっているの  
だろう」(山田耕一郎著「青森山  
岳風土記」、北の街社発行、昭  
和五十四年十月五月初刷)

数日後にM氏から第2弾の  
メールがきた。へ昨日の夜、更  
おもしろいデータを発見しま  
したのでお知らせします」――  
ネットで見つけたという山行記  
録のブログなどが添付ファイ  
ルで寄せられていた。

①：「御鼻部山口の入山地点か  
ら雨具を付けて日の出近くに  
入山。(中略)善光寺平分岐は、  
地図上886mの地点となら  
う。小休止して出発。10分もし  
ないでソデカ谷地に着く。ソデ  
カの杉を見物に踏み跡を辿る。  
西側の湿原を突っ切って藪を漕  
いで行くと、眼前に村の神社の  
杉の森みだいなのが現われる。  
これがソデカの杉である。旧県  
道にも1本、10mほどの杉が  
立っているが、注意しないと見  
過す」

②：「大谷地を経て櫛、駒、乗  
鞍、赤倉の諸峰を展望できる前

谷地を経て、ソデカ谷地へ。旧  
道には「一本杉が立っている。西  
側の湿原を突っ切ると鎮守の  
森を思わせる杉が10数本現わ  
れる。(筆者注：猿倉温泉の方  
角から歩いてきたと思われる)

③：「袖ヶ谷地(ソデカ谷)：御  
鼻部山山頂近くにある御鼻部  
山口から入山し、北に2時間ほ  
ど旧道を歩いた所にある湿原。  
道の左右に湿原が広がっており、  
標高は860m程度である。

袖ヶ谷地の西側湿原を突っ切っ  
て踏み跡をたどり、藪を漕いで  
西へ行くこと5分ぐらいいとこ  
ろにソデカの杉がある。神社の  
杉木立を思わせるような太い  
杉の群落、通常この地区の杉が  
育成できる限界は標高700  
m程度なので、各種の研究所で  
調査研究が行われている」

④：「前谷地を過ぎ、ソデカ(原  
文ママ)谷地の道路上の杉を見  
て、西側に向かうと立派な杉の  
林が見えてきた。(津軽藩と南  
部藩の)藩境の目印に植えられ  
たという伝説の代物だが、科学

者の花粉分析では天然とか」

## 山男の意地に火がつく 見つかるまで杉林探す

M氏はメールでこう解説す  
る――「どうやらこれらの資料  
を総合すれば、ソデカ杉の位置  
は、(私たちが)休憩した西側の  
小湿原を西進して藪を突き抜  
ければあるのではないかと思  
います。また、私たちが見たのは一  
本杉というものらしく、ひよっ  
としたら一本杉のほうは人工  
植栽かもしれません。いずれに  
せよ八甲田の真ただ中に杉が  
あるのはおもしろいことです。  
次回の探索に向けてのモチベ  
ーションを上げてください」

次回の探索！ やはりM氏  
はリベンジするつもりなのだ。  
M氏とK氏なら見つかるまで  
笹藪を漕ぎ続けるだろう。

M氏から寄せられた資料を  
プリントアウトしてNは再読  
してみた。「一本杉」と立派な  
杉の林」とは、別物なのである。  
山行記録のブログには、『旧道

には一本杉が立っている』、そこ  
から『西側の湿原を突っ切ると  
鎮守の森を思わせる杉が10数本  
現れる』とある。そこでM氏は、  
「私たちが休憩(昼食)した西  
側の小湿原を西進して藪を突  
き抜ければあるのではないか」  
と推測する。その距離はわずか  
に「5分ぐらい」ところが探検  
の日、M氏とK氏、S社長が、一  
本杉から西側へ藪を漕いでみ  
たけれど、10数本の杉は発見で  
きなかったのだった。

2回も来ているのに「進展が  
なかった」とK氏は悔しがらな  
かつた。としきり、一本杉のすぐ近くに、  
『神社の杉木立を思わせるよう  
な太い杉の群落』はあるのだ。  
事実、ブログの山行記録にはそ  
の写真が添えられている。それ  
を見ないことには、ソデカ杉を  
見たとは言えない。山男として  
の意地に火がついたのだろう、  
温川温泉で汗を流しながら、M  
氏とK氏は早くもリベンジの  
話をしていった。

「春山ならば楽に探せると思



〈ソデカ杉探検スケジュール〉  
 十和田湖畔の生出キャンプ場に1泊。  
 翌キャンプ場出発7時30分→登山口  
 (御鼻部山)8時→ソデカ杉10時20分  
 (片道約2時間)→昼食→(還り)登山  
 口(御鼻部山)13時30分

ますが、皆で行くのなら今年の秋あたりはどうでしょうかね」とM氏。「いいんじゃないの」とK氏が応じる。話しかけられるのを避けるように、疲労困憊のNはしきりに湯をすくっては顔をこすっていた。

カ杉が生えていた南八甲田は、青森市街から見える北八甲田の裏側にあたる。一本杉のそばにあるらしい、まだ見ぬ10数本の杉。それを見に行こうと、M氏からそろそろ『ソデカ杉探検第2弾』の誘いのメールが届くだろう。

それへの備えもあってNは、

週に2度ほどウォーキングに励んでいる。自分には山道を往復4時間歩く体力がある、のだという自信が牽引力になっている。自宅から浅虫温泉までも歩いてみた。2時間かかった。道の駅ゆきさ浅虫の展望風呂に入り、バスで帰ってきた。

ウォーキングの途中、立ち止まって汗を拭きつつ、Nは、己にけしかけるように、つぶやいてみる。

——リベンジ。

### 一本杉から目と鼻の先 稚樹も育つ群落を形成

リベンジは、その年の11月3日に行われた。すでに八甲田山のとつぺんは初冠雪で白くなっていた。鎮守の森を思わせる杉は、前回(6月)発見した一本杉から目と鼻の先にあった。1週間前に、M氏とK氏がコースの状況の下見に訪れ、こしかな、と確信して藪を突っ切った先にあったのだ。

20本はあるかという杉の

推定樹齢は200年。周辺に稚樹も育っており、一つの群落を形成していた。ついに会えた。今後、ソデカ杉に会いに行くことはあるだろうか。ないかもしれない。が、人知れぬ南八甲田の山深くで、マンモスの牙のような枝で豪雪から身を護りながら、ソデカ杉たちは生き抜いていく。

(関連写真124ページ)



リベンジで発見したソデカ杉。群落をなし稚樹も育っていた